東久留米市市民大学

記憶を辿る旅　水俣・アウシュヴィッツ・能登～歩くことと記憶 ― ソルニットの思想から見る〈痛みの地〉をめぐる旅～

咲花昭嗣

本稿は、東久留米市市民大学中期コースで行った講義の概要として、水俣、アウシュヴィッツ、能登を訪れる経験を歩行と記憶の関係から考察したものである。旅を個人の体験にとどめず、訪問者のまなざしや、移動の機会を規定する社会的条件にも目を向ける。そのうえで、レベッカ・ソルニットの歩行論を手がかりに、土地を歩くことが、資料から得た知識と身体的な感覚を結びつけることの過程を検討する。三つの場所は、公害、ジェノサイド、災害という異なる歴史をもつ。それぞれの固有性を踏まえ、水俣では被害の歴史と現在の暮らし、アウシュヴィッツでは遺構と歴史的説明、能登では喪失と生活再建の継続性を論じる。痛みの記憶をもつ場所を訪れる旅には、訪問者の感動を結論とせず、現地の人びとの言葉と資料に学び、訪問後も問いを持ち続ける姿勢が求められる。

キーワード：歩行、記憶と場所、現地学習、水俣、アウシュヴィッツ、能登

1. はじめに―なぜ、その場所へ行くのか

写真や映像を通して、遠くの土地を知ることは容易になった。それでも私たちは、ある場所へ行き、そこに立とうとする。画面で見ることと現地に立つことのあいだには、どのような違いがあるのだろうか。

本稿で取り上げるのは、水俣、アウシュヴィッツ、能登への旅である。これらの場所は、それぞれ公害、ナチス・ドイツによる大量殺害、地震とその後の生活再建に関わる。出来事の原因も、責任の所在も、被害が続く時間のあり方も異なる。三つを単一の「悲劇」として論じることはできない。一方、そこを訪れる者には、あらかじめ学んだ知識を現地の風景や人びとの生活とどう結びつけるか、という共通の問いが生じる。

筆者は自由学園最高学部での九州研究旅行やポーランド研修旅行、能登半島地震後の支援活動を通じて、学生や生徒とともにこれらの土地を訪ねてきた。教室で知った地名が、歩ける距離をもち、人が暮らしている場所として現れるとき、学習者の問いは変わる。本稿では、その変化を「歩くこと」と「記憶」の関係から考えたい。ただし、現地を訪れたという事実によって、そこで生きた人びとの経験を理解できるわけではない。この限界を自覚することを、議論の出発点とする。

2. 旅を見る社会学と、歩行を考える思想

旅は個人の自由な選択のように見える。しかし、どこを訪れ、何を見ることに価値があると考えるかは、交通網、観光産業、報道、教育、行政による場所の紹介と無関係ではない。ある土地が「名所」として広く知られる一方、別の土地の歴史は十分に伝えられないこともある。旅先は訪問者にとっての目的地であると同時に、そこに暮らす人びとの生活の場である。訪問者は風景を見るだけでなく、自分が何を見ようとしているのかを問われる。

旅に出る機会そのものも平等ではない。費用や時間、健康状態、仕事や家族の事情によって、移動できる範囲は異なる。現地訪問に教育的な意義を認めるとしても、「行かなければ分からない」と言い切れば、訪問できない人の学びを軽んじることになる。現地での経験は、文献、証言、映像、対話による学習と組み合わせてこそ深まる。

こうした社会的条件を踏まえたうえで、歩行の意味を考えたい。レベッカ・ソルニットは『ウォークス―歩くことの精神史』で、歩くことと思想、文化、政治との多様な結びつきをたどっている。徒歩による移動には、速い交通手段とは異なる時間の幅がある。地図上では短い道のりにも、坂、建物、人の声、土地の使われ方がある。歩く人は目的地へ向かいながら、予想していなかったものに立ち止まることができる。

講義では、ルソーの散歩と思索、メルロ＝ポンティによる身体と世界の関係にも触れた。これらを同一の理論として扱うことはできないが、思考を頭の中だけで完結するものとせず、身体が置かれた場所との関係から考える手がかりとなる。本稿でいう「歩行する記憶」とは、感覚だけで過去を理解することではない。史実や証言を学んだ人が現地を歩き、得た知識と目の前の風景とのあいだに生じる疑問を、再び資料や対話へ持ち帰る過程を指す。

3. 水俣―被害の歴史と暮らしの現在

自由学園最高学部の九州研究旅行では、「生と死」を通して人間・環境・社会の関わりを学ぶため、知覧、水俣、長崎を訪ねている。水俣では、水俣病歴史考証館や水俣市立水俣病資料館などで被害の歴史に学び、地域を歩く。

水俣病を理解するには、原因や被害、認定をめぐる問題、地域社会に生じた分断を知る必要がある。同時に、水俣は公害の「跡地」だけではない。そこには海があり、町があり、今も人びとの生活がある。訪問者が美しいと感じる風景と、その場所で起きた被害の歴史は、簡単には一つに重ならない。資料館で目にした地名を実際に歩くとき、その隔たりに立ち止まることになる。

水俣を過去の公害事件として閉じてしまえば、被害を受けた人びとが続けてきた生活や運動、表現を見失う。反対に、現在の景観だけを見れば、病と差別をめぐる歴史を遠ざけてしまう。石牟礼道子の作品に描かれた身体や言葉も、被害を抽象的な数字としてのみ受け取らないための手がかりとなる。ただし、文学作品の表現を、すべての患者の経験を代表する声として扱うべきではない。

講義では水俣を「痛みと赦しのはざまを歩く」場所と表現した。この「赦し」は、被害を受けた人に赦すことを求める言葉ではない。壊された関係や残された対立を、外から来た者が解決済みの物語にできないことを含む問いである。水俣を歩くことは、経済成長や便利さを支えてきた社会のあり方と、その陰で傷つけられた身体に目を向けることにつながる。

4. アウシュヴィッツ―沈黙と歴史的説明のあいだで

ポーランド研修旅行では、学生とともにアウシュヴィッツ＝ビルケナウを訪れてきた。収容所跡を歩くと、建物の配置や移動の距離が、写真や地図とは異なる仕方で迫ってくる。訪問者が言葉を失い、写真を撮ることにもためらいを覚えるのは、珍しいことではない。

しかし、「沈黙が支配する空間」という印象だけで歴史を語ることはできない。何が、誰によって、どのような制度のもとで行われたのかを、遺構、展示、記録、案内者の説明に即して学ばなければならない。「言葉を失った」という感想を学びの終点にしないことが重要である。

講義では、ヴィクトール・フランクル『夜と霧』に描かれた、過酷な収容所生活の中で空の美しさに心を奪われる場面にも触れた。その場面を、苦しみの中にも美しさがあるという安易な慰めとして読むことはできない。むしろ、人間から尊厳を奪う暴力の現実と、その中でも失われ尽くさない感受性との緊張を考えさせる。文学や証言に向き合うときにも、訪問者の感動が被害の歴史を覆い隠さないよう注意が必要である。

アウシュヴィッツでの学習には、沈黙と対話の往復がある。現地で直ちに言葉にできない経験をもち、後に史料を読み、他者と語り、自分の最初の受け止め方を問い直す。その過程は、差別や排除を過去だけの問題として片づけず、現在の社会で人を分類し、人間性を否定する言葉や制度にも目を向ける契機となる。

5. 能登―喪失の中で続く生活に関わる

能登半島地震後、自由学園の学生や生徒は輪島市、珠洲市、志賀町、七尾市などで支援活動に関わってきた。避難所での炊き出し、仮設住宅での交流、小学校や学童クラブでの活動など、その内容は現地の状況によって異なる。

能登を訪れることは、保存された史跡を訪問することとは異なる。被災の記憶が、生活再建の過程と同時に形づくられている場所へ行くからである。被害を示す風景の先には、住まいや仕事、学校、地域の関係を日々つくり直す人びとがいる。外から来た者が、学びや感動を得るために、その生活を一方的に眺めてよいわけではない。

講義では能登を「喪失を超えて歩く」場所と呼んだ。ただし、喪失は訪問者が見つけた希望によって解消されるものではない。「復興」という言葉のもとで、回復を急ぐことを住民に求めてもならない。学生たちが現地で担える仕事には限りがある。それでも、一緒に食事をつくり、話を聞き、子どもたちと過ごし、再び訪ねることはできる。支援を一度きりの行為にせず、地域への関心を持ち続けることが、訪問後にも問われる。

能登を歩くことは、過去の被害を確認するだけでなく、そ

こで続く現在の生活に接することである。それは、災害の多い社会で、離れた地域の人びととどのような関係を築けるのかという問いを、訪問者自身に返してくる。

6. 身体に残る記憶と、訪問者の責任

講義では三つの旅を、「痛みを引き受ける身体」「沈黙を聴く身体」「希望を運ぶ身体」という言葉で整理した。これらは各地域の本質を表す名称ではなく、訪問者に求められる態度を考えるための表現である。

水俣では、被害を遠い過去にせず、現在の社会の仕組みと結びつけて考える。アウシュヴィッツでは、自分の感情だけで理解したことにせず、説明と記録に立ち返る。能登では、支援する側とされる側を固定せず、相手の現在の生活と継続する関係に目を向ける。必要な応答は、それぞれ異なる。

三つの場所に共通するのは、記憶が土地に刻まれると同時に、何を記録し、誰の声を伝え、どう語り継ぐかによって、その意味が形づくられることである。どの記憶が広く知られ、どの声が聞かれにくいのかは、社会的な力関係とも関わる。訪問者もまた、その場所について何を見て、何を人に語るかを選ぶ一人である。

歩行は歴史の理解を保証しない。現地で抱いた印象が誤っていることもあるし、訪問者には知り得ない経験もある。それでも、歩くことで地名が具体的な距離をもち、既に学んだ知識が風景と出会い、自分の見方が揺さぶられることがある。その揺らぎを急いで感動や教訓にまとめず、資料を読み直し、人の言葉を聞き、自分の生活へ問いを持ち帰ることに、現地学習の可能性がある。

記憶を辿る旅は、過去を訪ねて終わる旅ではない。水俣は環境と社会の関係を、アウシュヴィッツは人間の尊厳と排除の問題を、能登は災害後の生活と支え合いを、現在の私たちに問い続ける。歩くことによって得た問いを、訪問後も手放さない。その継続の中に、記憶を未来へつなぐ学びがある。

参考文献

- ソルニット、レベッカ著／東辻賢治郎訳(2017)『ウォークス―歩くことの精神史』左右社
- 石牟礼道子(1969)『苦海浄土』講談社
- ヴィクトール・フランクル著／池田香代子訳(2002)『夜と霧　新版』みすず書房